
Mirror Room

maki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Mirror Room

【Zマーク】

N3029M

【作者名】

maki

【あらすじ】

誰にでも惚れてしまつ超絶美少女・遊美・幼なじみの畠・畠と不倫している専業主婦の美香、いろいろ混じり合つてます。

前編（前書き）

こんな感じの小説を書いてみました。書いてて恥ずかしい・・・。

昌「…………おはよー」

遊美「あつ、マーサじゅん おはよー」

別れた女子と毎朝顔を合わせるのは辛くないか?って言つてきた奴は山のよひこる。

……………辛いに決まつてんぢゃない!バカじやねーの!
!?
!?超大好きだったのにわあ、

「他に好きな人ができる」

ワケわかんないわ!あっちの方から付き合つて言われて舞い上がつたあの時の自分を殴り倒したい。調子を乗りすぎるなつて。

最初は中学だった。

誰とでも仲良くする遊美は自他共に認める惚れやすい女の子で、付き合つた男子（男性含む）の数は20から先は覚えていない。数え始めて2ヶ月の事だった。

そんな折、浮気、不倫、寝盗り、つつもたせの噂まで、まじとじやかに囁かれ始めた中2の秋、

遊美「マーサ大好きっ！」「そ結婚して！」

ヤローは公衆の面前で俺に熱い包容と接吻をブチかましてきた。今思い出しても体が火照つてくる。気持ち悪い。

俺がいつも事だと思つて何も言ひ返さなかつたため、学校全体（先生達も含む）の公認カップルになつてしまつた。ワケが分からない。

でも心のどこかで喜んでいる自分がいた。1年の時から同じクラスだったが、俺の美遊に対する第一印象は

「ヤバイ、惚れそう」

だつたというのは誰にも言つていない。

だつて外見だけなら×××（国民的アイドル）や××××（映画やドラマに引っ張りだこ）とか美少女なんだから。

人の外見を表す形容詞をどう扱えば良いのか分からない。苦しい表現をするなら、『かわいい』を極めたような、それぐらいに見た目だけならU級なのだ。

みんなに冷やかされたりするのも一興と思つていた終業式、前述のように突然フラレた。相手は1つ年上のヤンキーだった。しかも格好良くもない脂テブ、自分の容姿にそこまでの自信を持つていなければ俺でもさすがにアレより「バス呼ばわりされたらキレる。

3年に上がつてすぐに一人は別れたらしい。いつもの様に気まぐれ娘の心操術だった。

知り合い共がイチイチしてくる報告に苛立つた俺は美遊と関わるのをやめた。話しかけても無視したし、強引に近づいてきて何か言って來ても相手にしなかった。

とある日、美遊が学校に来なかつた。

「学校つていかにも出会いが溢れてるんだよー? 休んじゃうなんてもつたいたいよー」

どんな目的で義務教育を享受してゐるんだと思ったが、そんなThe・風邪なんかひかないバカである美遊が学校を休んだなんて初めての

事だった。

その日の夜、メールが来た。

「来てください」

いつもだったら溢れんばかりの絵文字や顔文字でいっぱいの液晶画面が広く感じられた。

ショッちゅう夜中に会いたがれた時に利用していた公園に走る。とにかくいつもとは違う遊美の様子が気にかかるようがないほどに心配だった。

遊美がそこにいるなんて確証はなかつたけれど、いつこう時はとりあえず急ぐものだとさすがにわかつっていた。やっぱり男の子だし。

公園に行くとそこには見るも無惨に顔を腫らした遊美がいた。

「おいつ！？誰にやられたんだ！」

明らかに切羽詰まっていた俺の質問に対し、遊美は答えなかつた。

「へへへっ、やっぱり優しいマーサはすぐ来てくれるよね

王子様みたい」と安心しきったような笑顔を見せせられて張り詰めていた神経に余裕が戻つてくる。それでも遊美的顔は痛々しそうに腫れ上がっているのだ。

「先輩の仲間にぶたれたの」

例によつてあの脂デブだつた。あの男は外見もさることながら性格の方もなかなかお粗末で、女こどもにも平氣で手を擧げるようなク

ソ野郎なのだ。しかも今回に至っては自分の手すり汚していないらしい。最悪と言つても良いくらいに腐つてやがる。

「家族はこのことしつてんのか?」

「ううん、この顔見たら慌てちゃうかなつて思つたから友達の家に行つてたつてウソついた」

「ふうん……いや、だつたらお前は昨日の夜から今にかけてまでどこで過ごしてたんだよ!」

「ここ」

「野宿じゃないか!」

とりあえず病院に連れて行つた。それから遊美に家に帰るよう説得して、遊美の両親に細かい事情を説明して家に帰り着いた頃にはもう4時過ぎだつた。

翌日は俺も学校を休んだ。あの身も心も最高に汚れきつてこる脂^テブとケリを付けるためだ。

その翌日には遊美も学校に来ていた。大きいガーゼが痛々しいのががこちらの真新しい痣や傷なんかと比べたら全然マシだった。

「あははっ、お揃いだね!」

……………クソつ‘なんでそんなに可愛いのに平氣で人に笑いかけられるんだ。

まだチャンスがあるんぢゃないかって思つてしまひぢゃないか。

この件をきっかけに周りから復縁しろ‘復縁しろ’としつこく言わ
れたが当の本人は2コ下のハーフの美少年に夢中になつてたんだか
ら俺なんかじやあ話にならない。あつという間に時間は過ぎていっ
て、卒業式になつた。

俺は一度問題を起こしたせいで志望校には行けなくなつたため 少
しレベルを下げた自宅付近の高校に進学することにした。
遊美はあんな性格にも関わらず意外と頭が良いので進学校に進んだ。

割と俺の高校の近くだ。

「でも家も近いからショットを遊びに来ても良さよ。」

「ばかじやねえの？」

俺は前回の脂テープの一見のせいで遊美的両親からやたらと警戒されていた。こつちは無実どころか関係すらしてないっていつの間にか…。

「なあ、遊美」

「おつ、珍しくマーサからの質問だね」

「そんなに珍しいのかよ…・・・・・」

「そもそもマーサの方が私に喋りかけてくる」と血眼珍しこと想つ

よ？」「

「・・・・・それもそうだな」

「で、何が聞きたいの？」

マーサの質問にだつたらスリーサイズまでOKだよ」とか相変わらずバカなことを言つていた。こんなに男の煩惱刺激したりして、口イツの高校生活が今から心配だった。

「今さーおれがおまえに好きだって言つたらーお前はビリやねー。」

この質問には答えてくれなかつた。あんなに脳天氣を形にしたような女が困つたように顔を曇らせるなんて、これっぽちも予想してなかつた。

それから家が近いし学校も近い俺たちは登校中とか休日とか普通に会つた。というより見かけるのだ、

ほぼ毎日。最初は気まずかつたりしたが今では挨拶くらいする。それでも毎日会つているのに疎遠のような感覚だつた。

さて、過去の話はおしまいだ。これからは今の話。

中学の時からのクラスメートは今だに俺の方が引きずつていのと思つていて、しおりちゃんを作れと言つてくる。しおりこいの上ないし、そういう関係はもうこいつこいつだ。

そう思っていた1年の冬　ちょっとだけ奇跡を信じてみたくなる出来事が起きた。

「君かわいいね」

そんな風に声をかけてきた中西美香さん、28歳。細身で巨乳、おまけに童顔。くるくると巻かれた髪の毛は年相応以上のかわいらしさ

さがあつた。もう、総合的な面においては遊美以上のものが、つて何を言つているんだ、俺は。

美香さんには家庭があつた。旦那は7つ年上の営業マンで、じじいは小学生が2人、どうやら専業主婦独特の暇つぶしの相手に俺は選出されてしまつたらしい。

ばれた時のリスクを全部知つていたにも関わらず、年上の人魅力には勝てなかつた昌少年が不倫の道をまつしげらになつたのはその数週間後で、あつという間に関係を持つてしまつた。

ただ、時々美香さんが遊美に見えてしまつにはすこく参つていた。美香さんと遊美は似ているのだ、顔なんかじゃなく、雰囲気から何からが。

「昌君は好きな子とかいないの？」

「…………その質問はどう答えたつて一つしか選択がないんですよ」

「あら、誰と誰なの？おばさんはすつゝく気になるなー」「…………一人は美香さんですから大丈夫ですよ」

「ふふ、嬉しいなー、昌君大好きつー！」

……………ほら、まだど

ことなく遊美に似たようなことを語り込んだ。といふかこんなにいふ人を不倫に走らせる旦那は全人類に土下座で謝るべきだ。マジで。

そんなこんなで不倫デイズを満喫していた2年の夏、デートをすることになった。意外にも初デートなのである。

待ち合わせに20分も早く来てしまったのにも関わらず、待ち合わせ場所に到着したのとほぼ同時に美香ちゃんは来た。数秒違いである。

「まつた？」

「お綺麗ですね」

ベタな駆け引きをするべきだったんだが、つい本音が口から出てしまつた。

「……………行こつか？」

「……………行きましょうか」

恥ずかしそうに手に触れてきた美香さんの手を少しだけ強く握り返す。すごく柔らかかった。いかにも女性の手って感じ。

遊美の手もこんな感じだったな……………
・イカン・イカン。身に余る幸福の最中にそんな黒歴史を思い出しては。

ちょっとだけ横を見てみると少しだけ恥ずかしそうに顔をうつむかせている美香さんの表情を見た。そういうえば今の旦那とはお見合い結婚だつて言ってたな、こんなデートはしたことないとも言つてたし。それでも可愛い。年上の女性が照れている様子つてこんなに可愛いものだったのか。

よく見たら顔もちよつと赤い。そんな事を思つていたら田があつた。

一
あ

• • • • •

• • • • •

「……………」はじめんねー！口も年上なのにこりゃ下して貰いつぱ

たして

「年齢なんて関係ありませんから」と、おじいちゃんが答へました。

本当に!』

ええ、本當ですとも」

嬉しき！

「氣をよくしたらしい」美香さんは腕にしがみついてきた。ほとんど密着状態である。こんな状況を美香さんの近所に住んでいる奥様方に見られたらお互いの人生を棒に振ってしまうと思いつながらも振り払うことは出来なかつた。

そんなことを考えていたモンだから、前方の注意を怠っていた。クラスメートに会うかもしれないという警戒がこの時だけ完全に解かれてしまっていた。

「マーク・

俺のことをこう呼ぶ奴は 地球上で一人しかいない。

後編へ続きます

中編（前書き）

当初は2話構成にするつもりでしたが、3話にしてしまいました。

声のした方向を見ると遊美がいた。運が悪い事に、その隣には見た覚えのある女子がいる。恐らくは友達と遊んでいたところだらう。

「美香さん、走れます？」

「？お友達なんですよ？」

「お友達だからです！」

おそらくいきなりでは走れそうになかった美香さんをさつと持ち上げ（ほとんどお姫様だつこのような、といつかそれ）思いつきり遊美の隣を駆け抜けた。遊美の友達をかるく難いで

「ふわわわっ！…」

珍妙な声が聞こえたが気にしない、学校で妙な噂を立てられたらたぶん終わる。ウチのクラスの担任は「年上の女性と？うーわーやはり手」「とかきっと言うんだろうが、それが不倫だと知つたら話は別だ。だって男に逃げられてフランクばかりと聞くし。一応美香さん成人女性。同年代に見えなくもない童顔とはいえ、ちょっと無理があるかもしねい。

ん？なんで逃げるのかって？ヤツは今や他校の生徒だろって？おいおい、俺が通っているのは地元の高校だぜ？遊美と知り合いの女友達なんかもうウジヤウジヤだ。しかもいつ選抜したのか分からぬくらいにバカ揃い。奇跡の並び、長眺め。尻軽どころか身軽以上。

とにかく、情報がバレる可能性ができるだけ削ぐためとはいって、公道を伝説のような年上の究極美女をお姫様抱っこしながら走るのはやりすぎだなと、素直に思った。

でも止まるワケにはいかないんだ、なんというのが、バレるバレない以前に、テンションが上がってしまっているのだ。どうしようもなく止まらない。

「あつ、怖い！…ダメッ！…止まつてってばー…」

ギュウ～ッ、あつ、この感覚は・・・・・天国？

靴がギキイイイン、となぜか金属音を立てる。とにかくにも、短

いながらもハードな逃避行は終わった。

「…………あ、あ～のう…………」

「うう～…………怖かった…………」

まだ美香さんは俺にしがみついている。肩口を掴まれて上半身を押しつけ合いつ形になつていてるから、うん、悪い気はしない。

「もう大丈夫ですよ」

そう言つて美香さんの頭を撫でる。「うわあ～すひいへりやひり」とてる。できるのなら数年間はさわり続けていたい。

「…………ほんと?」

「…………はい」

平静を装つてはいたが、その時的心の中は台風よりもすこことくなつていた。

う、う、う、う、う、う…………上田づかにだと…………?

この人はひょっとしたら「己の魅力のほどを知つていて、それを存分に利用する魔性の女なのではないだろうか、それとも魔法使い？はたまた心理学者？

とりあえずテンパつていて「う」という理解ください。

「なんでこきなり走り出したりするのよ？・・・・・」
「すみません、学校に僕たちの関係がバレたらたぶん僕は退学です」
「うーん、大丈夫よ、どうせ先生だつてちよつとだけ昌君がおませ
さんなんだつて思つだけよ？」

「・・・・・」

その先生が一番の問題なんだけどな・・・・・

「とりあえず、デート再開しましょ、うか？」

「フフフ、そうね」

美香さんはそう笑いながら今度は自ら俺の手をしつかり握った。

「ねえ、昌君。こきなり抱き抱えられでびっくりしちゃって言へな
かつたけど、けつこう力持ちなんだね」
「そんな、恥ずかしいですよ・・・・・」
「ん？ 照れてるの？」
「照れてなんかいませんよ」
「嘘だよ、照れてるんでしょ、う？」
「照れてませんって！」
「なにムキになつてんの？ カワイイ！」

美香さんはそつからかいながら首の辺りに抱きついた。

かりとだけためらつて、ついでに事を言つた。

「せりやあ照れますつて」

不意に言われた言葉に少し面食らつた美香さんは抱きつく力を少し緩める。その隙に

「・・・・・」

「ん・・・・・んん・・・・・」

周りに誰もいないのを計算に入れてのことだった。あとで計画的な

男は嫌いとかふくれつ面で言われるだらうが、せひと可愛こはすだから気にしない。

「…………ふはあつー」

・・・・・息してなかつたらしい

「鼻呼吸できないんですか？」

「うう～私は見合い結婚だから実は今のが…………」

「…………初めてなんですか！？」

そういうえば、何度か×××とか×××とかしたけど、せひこやキスしたことば…………

「…………引いかやつてしまふ、三十路近いおませごがこじまど無経験だなんて…………」

「…………俺は美香さんそのものが好きですから」

「…………昌君は！」と私の予想を覆すよね

優しく微笑みながら、やつこつと美香さんは泣き出していました。

「美香さん・・・・・・」

「なんで私はあの子達と同じ時期に生まれて来れなかつたんだろう・・・・・・」

「・・・・・・・・」

あの子達というのはおそらく遊美のことだらう。

「昌君と同じ年に生まれてたら・・・・・・絶対に昌君と出会つてみせて・・・・・・今よりももっと仲良くなつて・・・・・・大好きだつて言つのに・・・・・・」

「美香さん・・・・・・それ以上は」

「・・・・・・『じめんね・卑怯だつたね』

「・・・・・・・?」

「昌君に愚痴を言つたために『データしたわけじゃないのに・・・・・・昌君をはけ口みたいに使つちゃつて・・・・・・か』く卑怯だよ」「大人なのに、小さい呟きが耳に入るとどうしようもなくやるせない気分になつた。

「・・・・・・別に構いませんよ」

「え・・・・・・どうして昌君?」

「だから、別にいいですよ。家庭や旦那さんの愚痴を俺に言つても、大人つきつと大変でしょ?」

「昌君・・・・・・」

「すごく疲れてて誰かに甘えたいなー、って思つた時に俺に言つてくれればいいですから。その時は愚痴るなり甘えるなり、その時だけ俺は美香さんの味方でもあり奴隸ですから」

「昌君つーーー!」

本日一度目の抱きつきはなかなか速度と威力があつたが、大見得切つた代償とでも考えよう。

思い切った事を言つてしまつたが、自信はない。大人の女性を慰めるなんてまだ社会人にすらなりきれていない俺では無理かもしれない。

でも、守つてあげたいっていう今の気持ちだけは、白那にも負けねえ。

中編（後書き）

次で何とか最終回です。

後編 - どうかおしまつ? (前書き)

これでまとめきれなかったらアウトwww

後編 - といつかおしまい？

「何なんだらう？」の罪悪感のよつた・・・・・・

「大丈夫よ、本心を伝えれば」

結果から詰むつ、美香さんは田那と別れることにになった。

「ちょっと、ええー？」

「田那について生きていいくのにも疲れてたしね、良い機会だつた
もの」

それ以上は、語らなかつた。

離婚つきと大変だろ？高校生の俺でもそう思える。

「どものことも心配だろ？」親にも細かく説明しなければならないだろう。家のことだ、片方は出て行かなくてはいけない、ひとつしたら両方出て行くつていう可能性もあるだろ？住む場所がなくては人は生きていけない。

一介の高校生が背負えるはずのない責任を背負つてこれからは生きていかなければならないのだ。

「別に気負わなくとも良いよ」

美香さんがこう言つてくれなかつたらストレスでぶつ倒れていたかもしれない。

「今回の一件は私の判断だもん。仲の良くなかった日那から離れたかつた、見合い結婚の典型的な失敗例だつてみんなに言うから心配

しないで

「今日は大人の私が全ての責任を負います」

「…………頼もしそぎますよ」

そう言うと美香さんは何も言わずに笑ってくれた。

そして、今日は卒業式の翌日、美香さんの一人の「じ」もと念う田である。美香さんがなんとか親権を勝ち取つたらしい。旦那は本当に無機質な人だそうで、「じ」もを任せるのは心配だつたとか。

「いい? ドア開けるわよ?」

「・・・・・・将来的にはお父さんと呼ばれる可能性があるんですね」

「うん、って、いうか呼ばせるわ。私に刺激的な毎日をプレゼントする」と同時に安泰を奪つていつた男ですもの」

・・・・笑顔が黒い。

「離したりなんかするもんですか・・・・・・」

ぎゅううう、という腕の感覚がちょっと苦しい。それが愛つていうものなら今の俺には重すぎるかもしれない。

まあ、俺も最愛の人を離すほどもつらくしたりはしていないから負けじと身をくつづける。

「…………暑苦しい」

「いいじゃないですか、大学出たら夫婦なんですから」

ドアは開かれた。がんばれお父さん。

前日、まさしく卒業式の日。校門の前で蟻の大群と格闘しているバカ力がいた。遊美である。

「…………お前まさか

「すっぽかした」

「なにをしに高校へ進学したんだよ！？」

いや、卒業式に出ることが高校の全てではないと思うが。
「卒業式には出たよ、すっぽかしたのはお友達とやるお決まりの泣き会の方」

「ああ…………俺は相撲ティープに泣き会参加者だったから、どれくらい待つてた？」

「2時前にはここにいた」

現在の時刻は5時を回っている。

「…………大人びてはきたのにな…………」

遊美はここ最近でのバカ丸出しなオーバーリアクションをほどんど取らなくなつた。

大人になつたなつて言つたら

「人は傷ついて成長するものなのよ・・・・・」

・・・・・傷ついたのか。細かいことは聞けなかつた。でも細かいところは変わつていらないらしい。ここまで待つまゝつけめらうのがいい証拠だ。

「遊美は東京だっけ？」

「なんとかね、持つべきは親と窮地を助けてくれる友達とお金出してくれる彼氏ね」

「彼氏つていうかオジサマだろ・・・・・いいかげん援交まがいなことはやめろよ」

「いいじゃない、マーサには関係ないんだから」

よく考えたらマーサつて6年以上呼ばれ続けている。これで最後になるかもしないと思うと少しだけ寂しい感じもした。

「マーサは例の奥様のために花婿修行でもするの？」

ちなみにあの日の翌日に遊美は学校に来て根掘り葉掘り聞かれた。そういえば急に大人び始めたのもその時からだ。

「とりあえず大学出てから仕事見つけたら結婚して貰つ」ことにした。
本当は学生結婚でも良かつたらしいんだけどね・・・・そこら
辺はしっかり働くようにならないと、まあ・・・・・パパに
なれないし

「・・・・・気持ち悪い」

「自覚があるだけマシだと思つてくれ」

「自覚があつたらそれは最悪よ」

「それもそつか」

それから小一時間いろいろなことを話し合つた。将来の話や夢、人
生設計とか叶うかどうか分からぬ希望を口にしまくつた。

「ねえ、マーク。私はすまじくあなたに聞かなきゃいけない質問があるの」

「なんだよ？ 改まって」

「今でも私があなたのことを好きだったって言つたら、マークは喜ぶの？」

そこにあるのは鏡だった。

あの日の俺がそこにいた。

姿や形は違っていても今日の前にあるのは鏡だった。

卑怯にも、相手を困らせるような質問を投げかける誘導尋問。
文句すら言えないくらい。

「何ともねえよ、俺は一途なんだ」

「そつか、そうだね」

鈍感な主人公を演じるのは終わりにしておこう。社会人になつてパパにならなきやならないんだから。

「遊美よ

「なに?」

「好きだつたぜ」

「・・・・・私もだよ」

「美香さん」

「…………す”く疲れたからつてそこは顔を突っ込んでもいい場所ではないと思うんだけど」

「だつて美香さんの胸の包容力はウチの両親の数倍はあるんですねの…………」

「」ども達には少しの間出て貰つていい。美香さんに「大人の時間」と言われた途端に一人とも出て行つた。気の利きすぎる一人だつた。

「つていうか一人とも中学生じゃないですか…………」

「早く生まれた子だつたしね一人とも」

「ウソつき」

「大人は嘘をつく生き物なの」

「なんですかそれ」

「座右の銘つてやつ」

「もうちょっとカッコイイやつじゃないんですか?」

「かつこいいじゃない、二ヒルつていうか」

「最高にかつこわるいですよ、その姿勢が」

「何ソレ?言つときますけど私の方が年上よ?」

「見た目は変わらないじゃないですか」

「変わるわよ、日々成長するんだから」

「…………二十過ぎたらそれは老いとこいつのでは
「どうしー。」

押し倒された。両手両足の血肉は本当にきかないと。

「きかん坊の新田那さんにお灸を据える必要があるかな?」

「勘弁してくださいよ…………」

「…………私がおばさん扱つても好きでいいれる?
「そんな当たり前のこと聞いてどうするんですか?」

素早く体制を入れ替える。ここから後は想像に任せよ。

後編 - といづかおしまい？（後書き）

無理矢理と感じたら厳しくお願ひします。
できれば遊美サイドでも書きたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3029m/>

Mirror Room

2010年10月13日15時39分発行